にあこがれて、七世勘當の軒に佇む、かくても猶ほ親となり、子となれる一縷の情を恃めるに似たり、而かも未だ聲を出すに至らず、竊かに涙を呑んで哭す、杪冬正に三五、夜漸く深くして、積雪身邊を壓す、而かも遂に訴ふるの道を知らず、窮陰人易傷、傷此無衣客如何蒙雨霜、況んや失明の一女子をや、寒神に徹して到る、乃ち携ふる所の一子、躬ら衣を脱して母の爲めに之れを覆ふ、何等の悽絶、何等の悲慘、之を久うして垂死の瞽女僅かに暖を得て僅かに蘇す、老翁呻吟の聲を耳にし戸を開きて之れを覗ふ、咄嗟其絶縁の女なる事を知り忽ち戸を鎖し喝して曰く、狗子何ぞ死せざると。語氣緊迫、「寢る」といひ「逐ふ」といふ、動詞を現在の形としたる最も味ふべく、一句體言に富みて、中七字の結末を「や」とし、一句の終りを體言としたる、作者の用意を見るべし。

長き夜や物うき冠者が北枕

死人の枕は北に移すといへり、徒然草にも

夜のおとゞは東御枕なり、おほかた東を枕として陽氣をうくべきゆへに、孔子も東首し給へり、寢殿のしつらひ、或は枕常の事なり、白河院は北首に御寢なりけり、北はいむ事なり。

といへり、陰に向つて枕する事既に秋夜荒寥の感あり、而かも寢ねたるは「物うき冠者」なり、蕪村また曰く

夜を寒み小冠者臥たり北枕

と、前者は一夜長時間の感なり、長時間なるが故に「物うき冠者」に妙趣あり、後者は前者に比して短時間の感なり、短時間なるが故に「小冠者」に妙趣あり、前者は冠者の上に起るべき聯想を主眼とせり後者は北枕の上に起るべき聯想を主眼とせり、故に前者は「冠者が

北枕」として、「北枕」は前句に連從するの句となせり、後者は「臥たり、北枕」として、「北枕」は獨立の一句となせり、二者の間自ら輕重あり、既に輕重ありて、前者は「物うき冠者」に重きをなしたるが故に「長き夜」の感に照應し、後者は「北枕」に重きをなしたるが故に依て起るべき聯想は「夜を寒み」の感に映射せり、更に兩者が音調に注意し來らば「長き夜」、「夜寒む」の別、自らに到底せん、學者願くは歩々に心を留め切に其興趣を忘るゝ勿れ。

野路の秋我うしろより人やくる
萬目蕭條、行方遙かにして人を見ず、乃ち顧みて越し方を眺むれば唯秋風の颯々として、尾花がうれを渡るのみ。

近江路や野ぢの旅人いそがなん野洲がはらとて
遠からぬかは

西行

風駘蕩として、春日遲々、啖へ煙管の長閑さ、實に西行の詠は春なれや、蒼然たる郊野、四顧の中唯我あり、私かに脚下を看ず、影法師動く、蕪村の句は秋の色なり。

金屏の羅は誰か秋の風
予はこれを讀みて、ゆくりなくもテニズンのバアレーを思ひ浮べぬバアレーがスケッチの中に入りたる清淨無垢の田舍少女は、戀ひ慕ふ其人が尊き貴族の公達ならんとは夢にだも知らず、唯綠濃き野に筆執れる優しの風景畫家とのみ、其他は深くも思ひ到らずして、そが戀に震へる唇を、彼の少年が可愛の口に觸れてより、見るもの柏の木立、栗の森、なじかは愛の色ならざる、二人が未來を樂しみつ二人が住まむ賤が家を、幻に追ふもいぢらしく、彼の戀人の手に縋りて、うつゝともなく、園の大路を辿り行けば、構ゆゝしき門を入

りて、華やかに亦嚴かなる貴族の邸宅に導かれぬ、少女は心惑ひつつ、疑問の中に彷徨へるを、少年はさも慰め顔に振り向きつ、「こは皆我が所有にて、また御身の所有なれ」と、こを聞ける少女の顔色は青ざめぬ、彼の女が心に描けりし、畫師の茅屋の如何なれば斯く美麗なるものにてあるべき、我が身の程を顧みては流石に力なかりけめ、されど少年の飽くまで、いとほしく、飽までやさしげに、愛の腕に抱しめし、心靜けき慰めに、少女が胸も和らぎけむ、やがて公爵夫人てふ重き任務に呼び起され、三人の子まで成せるまで、夫人の位置に恰好しく、かひ〳〵しくも連れ添ひたれ、さばれ唯一つ彼が臨終の極みまで言ひつぐけたる「我夫、せめて今一度にてもあれ、我が昔し戀せしまゝの風景畫家にてあれかし」といへりし願ひの惱み失せず、この適當しからぬ緣をかこちつゝ遂に戀人の膝に永眠りぬ、バアレーが心の裡や如何なりけん、つく〳〵とそが永眠れる顔を守りつ少女が結婚の日に纏えりし、田舍娘の小袖を執りて、死骸の上に覆ひやりぬ、かくて彼の女が心の安けくあらむ爲めにとて。

"Bring the Dress and put it on her.
That she woren she was wed.

あはれ、優しき心かな、バーレーが目には金屏にのこれる綾羅も唯是れ、悔恨の原因なるべし。

或者はこの句を解して、夏纏ふべき羅のなほ秋風立ちても、金屏にうちかけられたらんまゝにてあるを、こは誰かものぞと一わたり心付きたるまでなりといへり、さるにても「誰か」の二字あまりに無意味ならずや、若し「誰か」の二字をして、句調を艶約ならしめむため

に用ひたりとせば、而して甚だ重きをなさずとせば、そは宛たる彼の春宵などにこそ、ふさはしからめ、蕭殺たる秋風を描かんには餘りに手緩し、又或は解して、宮怨などの情をうつせりとなす、即ち秋扇といへりしに同じく、君寵變へたる宮女の俤を「金屏」「羅」などにより忍ぶべき、よすがとなせり、そは、「誰か秋の風」と解せるの罪なり、「秋風」は「誰か秋風」にあらず、獨立の一句なり、予は羅を以て、夏纏ふべき者なる事を聯想する以前に、風羅坊の所謂、風に破れ易からん事を思ふものなり唯「秋風」に對して最も切實なる配合を得たりとなすのみ、「金屏」といひ、「羅」といふ、こゝに高貴の俤を忍ぶ、「誰か」の語は作者が自問自答の詞なり、其「羅」の主、作者因より之れを知れり、知つて之れを言はざるは、言はざるにあらず、言ひ得ざるなり、胸中最も切なるものあり、口之れを出す能はざるなり、「羅」の主は故人か、逢瀬絶えたる戀人か、彼の羅、こも誰かものぞ、噫〻遂に言ひ能はざるなり、こゝに至りて「誰か」の二字千鈞の重きをなす、即ちバーレーの一句を得たり。

唐黍のおごろきやすし秋の風

大分寒うなつて來たのでどうも骨がガタ〻〻する、ア、年はとりたくないものだ。

秋雨や我菅簑は未だぬらさじ

郊外の秋色、漸く一雨毎に色づきまさりて

下紅葉夜のまの露や染つらむ、あしたの原は昨日より色深き紅を分け行くかたの山ふかみ、實や谷川に風のかけたるしがらみは流れもやらぬ紅葉を渡らば錦中絶えむ（謠曲紅葉狩）

の光景を見んとて、時雨をこそいそぐなれ、風人墨客、彼處の山路

に杖を曳き、此方（となた）の野邊に露を分くれど、我まだ我菅簑は雨にせじ

句中「我」の字最も注目すべし、「我」は他に對して言へる言なり、即ち人はかく〳〵のあれど、我は然らず、など他と自己とを比較する場合に用ひらる、「吾」の如く單に自己の事をさしていへる言と大に趣を異にせり、故に「我菅簑は」といひて、他と之れを區別せり、この語あり始めて秋雨に色まじがちの野邊山路を韻士の日々に音づる狀を目堵すべし、次に「未だぬらさじ」といふ、作者が秋色を戀ひ慕へる情の鬱勃たるものを覗ふに足るべし、今日こそ彼處を尋ねんか、いや〳〵未だ行くまじな、明日こそは、いやまてしばし、さても心さわがし、山路の木々の色待つも切なしや、句意菅簑を時雨に染めむとは芭蕉翁即ち時雨の翁を慕へるなり、時雨の時にこそ、翁の跡を學びて旅立たんといふならん。

身の闇の頭巾も通る月見哉

固より客觀の句なり、頭巾着たる人のさも謹ましげに、通り過ぐるを見て、閉門の身をそと月に忍ばせしが、人には見せまじき面を月にかくせしか、兎まれこの月に、頭巾目深き扮裝（いでたち）、其身は闇なるべしと想像したるまでなり、假令ば紙治の一節。

只今春さま送つて參りし時、お客さまだ見えず、なぜ見屆けてこなんだと酷う叱られます、慮外ながら一寸と、編笠押し上げ面體吟味、ム、そでない〳〵氣遣ひなし、あとつめてしつぽりと小はる樣、しただるたるの生醬油、花車樣さらば後にあを菜のひたし物と、口合たら〳〵立歸る、至極堅手の侍、大きに不興し、こりや何ぢや、人の面を目利するは身を茶入茶碗にするか、などこれには來申さぬ、此方の屋敷は晝さへ出入固く、一夜の他出も留

守居へことわり帳につき、むづかしい掟なれども、御名聞いて戀幕ふお女郎、どうぞと一座を願ひ、小者もつれず先刻參つて宿を頼み、なんでも一生の思ひ出、お情にあづからうと存じた。

など云へる身の上の人目を忍ぶにてもあらんか、「身の闇」は極輕き意味なり、是等の句には殊更時代觀念の必要あり。

月今宵めくら突當り笑ひけり

ッンボ「是は聞いた、若し盗人がはいつたらば、其合圖に身共が膝を突かうと言ふか、菊「中々さうじや、ッンボ「是は一段とよからう、若し盗人がはいつたら膝を突け身共が防がうぞ、菊「心得た〳〵ア、扨も〳〵つんぼに物言へば性も心も盡きる事じや。

ッンボ「是はいかな事座頭と云ふ者は智惠の深い者じや、よい思案を思ひ付けた。

菊「ヤアいかう淋しい、ちとつんぼをなぶつて遊ばうソリヤ〳〵盗人よ〳〵、ッンボ「心得た、ヤレ盗人がはいつたぞ、出合へ〳〵、やるまいぞ〳〵。

菊、(笑うて)「扨てもをかしい事かな、よう盗人が居ようぞ、是はよい慰みじや面白い事かな、ッンボ「ヤイ菊市盗人は居ぬは、菊「何じや居ぬか、居ようが有つてこそ、(笑ふ)ッンボ「是はいかな事、座頭めがいかう笑ふが扨は身共をなぶりをつたと見えた、にくい事じや、致しやうが有る、ヤイ菊市、身共は此中小舞を稽古してようや、舞ふが、そちが目が見ゆるなら舞うて見せたいナア、菊「夫は面白からう、目こそ見えずと舞の聲を聞いて慰まう、舞うて見せい、ッンボ「何と置けと言ふか、菊「イヤ舞へと云ふ事、ッンボ「夫なら舞はうか、さりながら是れも果てた所で譽めねばならぬ、其合圖に果

てた處で顔を撫でう、其時譽めい、菊「何と合圖に果てた處で顔を撫でるか、ッンボ「中々、菊「いかにも譽めてやらう舞へ〳〵、ッンボ「心得た、さらば舞ふぞ、謡「こゝ通る熊野道者の手に持つたも椰の葉、笠にさいたもなぎの葉、是はどなたのおひじり樣ぞ、笠の內がおゆかし大津坂本のおひじりじや、あゝくわんじやひじりじや、(足にて顔撫る)、菊「エイヤア、扨も〳〵舞うたり〳〵、ッンボ(笑ふて)「是はいかな事、目の見えぬ者は何も知らぬ、身共が足で撫でたを知らいで嬉しがる、扨も扨も、面白い事かな、菊「是は合點がいかぬ、あれがあの如くに笑ふ筈はないが、思ひ付けた、扨は某が顔を臑で撫でをつたと見えた、扨もにくい事ぢや、ヤア返しに又致し樣が有る、ヤイつんぼ、身共も今の返禮に平家を稽古した、そちが耳が聞えるなら語つて聞かせたいなア、ッンボ「何といふぞ、平

家を語らう、よかろよかろ語れ、菊「さりながら語つても、そちが耳が聞えぬ程に是も合圖に果てた處で、手をさし上ぐる程に其時譽めい、ッンボ「何と今の手を上ぐるが合圖か、菊「中々、ッンボ「いかにも譽めう語れ〳〵、菊「心得た、語るぞ〳〵、平家「抑是のつんぼは片輪者の癖として、根性はすねうて臆病つんぼのやけつんぼ(手を上ぐる)、ッンボ「エイヤア、扨も〳〵面白い事かな、菊(笑うて)「是はいかな事、つんぼといふ者はおのれが身の上の事云ふに知らいで出來たと云うて嬉しがる是はをかしい事じや、(狂言、不聞座頭一節)

以て、めくらのウイットと性格を覗ふに足るものあり、今更にこの句をもつて一誦せよ、月今宵めくら突當り笑ひけり、興趣言外に溢る。

待宵や女あるじに女客

我曾て平家を聞き、忘る能はざるものあり。

中にも副將軍薩摩守忠度は或宮原の女所の許へ通はれけるが、或夜おはしたりけるに、此女房の局に、やんごとなき女房客人來て小夜もやう〳〵更け行くまで歸り給はず、忠度軒端に彳みで、扇を荒くつかはれければ、彼女房、野もせにすだく蟲の音よと、優に口ずさみ給へば、扇をやがて遣ひ止めてぞ歸られける、（富士川の事）

梨の木に寄てわびしき月見かな

蕪村また曾て句あり。

梨の花月に文讀む女あり

前者の面影を偲ふに、梨の樹葉は昨日今日散り果てゝ、葉ともわかず、實ともわかず、彼方の梢、此處の枝に二つ三つ疎らに殘れり遺賢獨り這の樹下に彳む、碧空月團く、星稀に、蟲すだく叢、露、零々たり、後者の面影を忍べば、朧に白き花の下、幻の如き女の、ただうつゝなく文を繙くも、やさしきや、前者を日本的の趣味なりといはゞ後者は正に支那的の趣味なるべし。

月見舟きせるを落す淺瀬かな

この月見舟、口紅つける盃を、すゝがせまじのいさかひに、煙草管とり落せし程の仲間にもあらざるべく、さればとて、前髪若衆の横笛に、聞きほれての過失、仕出來す程の其角振にもあらざるべし、さてこを船頭の咄へ煙管、月に見とれてとは宗匠とやらんいへる者の解なりとかや、蕪村に聞けば何の唯淺瀬に煙管落したまでのことぞ。

名月にゐのころ捨る下部哉

朧月夜の花の下には、このゐのころ、さし向き禿の懐に居らせまほしく、夏の夕には童子のものなるべし、寒月の下のゐのころ、人居るべくも思はれず。

十六夜や鯨きそめし熊野浦

紀州熊野浦は澎湃たる大平洋に面す、仲秋海面藍を堪えて、黒潮の押し寄せ來りしかと見ゆるは、鰯の一群なり、この頃鯨の遠冲に潮を吐きて出没するあり、熊野の水夫が鎗を研ぎ、手ぐすね引きて待つらん時は來りぬ、日本海の月は越の出雲崎に見るべし、大平洋の月に嘯かんものは去つて彼の熊野が浦の十六夜に行け。

後の月鳴たつあとの水の中

蕪村曾て句あり、

あちら向きに鳴も立ちけり秋の暮

心行に詠あり

心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ澤の秋の夕暮

鳴の色蒼然、正に秋暮の感に深し、其聲鵠々雨を望んで啼く、其居るや洳々たる池沼、汎塗の間に在り、野人其閑默の狀を評して、鳴の看經といへり、これを拉して、後の月に配す、妙。

泊る氣でひとり來ませり十三夜

閉窓寂々日相臨　從屬窮秋望難禁　潘室昔蹤凌雲訪
蔣家舊徑踏霜尋　十三夜影勝於古　數百年光不若今
馮前軒回首見　清明此夕價千金　（忠道詩）

稲妻や佐渡なつかしき舟便り

北陸道にて行脚して越後國出雲崎といふ處にとまる、かの佐渡が

島は海の面十八里滄波を隔て東西三十五里に横をりふしたり、峰の嶮難谷のくまぐまでさすがに手にとるばかりあざやかに見わたさる、むへ此島は黄金おほく出で、あまねく世の寶となれば限なく目出度島にて侍るを大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝにより て只おそろしき名の聞へあるも本意なき事に思ひて、窓おしひらきて暫時の旅愁をいたはらんとするほど日既に海に沈で月ほのくらく銀河半天にかゝりて、星きら〳〵とさえたるに、冲の方より波の音しば〳〵はこびてたましひけづるが如く腸ちぎれて、そぞろに悲しび來れば草の枕もさだまらず、墨の袂何故とはなくてしぼるばかりになん侍る、(芭蕉)

夫(つま)は金堀なるべし、相別れて幾とせ。

稲妻にこほろ〳〵音や竹の露

山を用ひず、水を用ひず、一個の竹篁をかり來りて、天地の寥廓を見はさんとす、阿佛尼即ち詠つて曰く

ぬしや誰れ山の裾野に宿しめてあたり淋しき竹の一むら

と、閑寂は即ち閑寂なるべしと雖も遂に平調の閑寂に過ぎず、或は其調の浮華にして温藉の想を缺けるが故なるべしと雖も亦遂に涅槃室中の感にあらず、即ち這の修竹を亂すに一陣の風を以てす。

玉みがくつゆぞ枕にありかゝる夢おどろかす竹のあらしに　西行

と、作者が描かんとしたりし清涼の氣肌を襲ひ、骨に徹する底の感は遂に見出す能はざるなり、芭蕉乃ち竹篁を舞臺として、之れに配するに一痕の新月を以てす、涼味地に滿つ、而かも其閑寂の景に至りては阿佛が一竹篁を假り來つて、左右手足を附せざりし眞味を愛

す、唯芭蕉能く、烏啼山更幽の妙諦を了せるものあり、即ち曰く

郭公大竹原を漏る月夜

と、杜宇一聲、雲外また蹤を留めず、涅槃室中物皆休息蕪村は即ち這の舞臺をして更に凄涼たらしめむとす、然れども未だ西行が愚を學ぶに及ばざりき、西行が詠の人をして、凄涼の感を惹起せしめ能はざりしものは、單調なる舞臺の動的時間餘りに長きに失したるが故なり、其失ふ所は恰かも阿佛が靜的空間の餘りに單調に終りたると同一の結果に歸す、蕪村能く二者の失を知り、また芭蕉の得る處を了せり、即ち瞬間凄絶の光景を拉し來りて、刹那微妙なる露の音を配す、中七字「こぼるゝ音や」の一句、一韻到底の文字なり、若し夫れ芭蕉の天才を以て岩石を削りて巨像を刻む底のものなりとせば、蕪村の天才は櫻實の核に人頭を彫る底のものならんか。

白露や茨の刺にひとつづつ

子規翁曾ていへり、

松葉の露といふ趣向と、櫻花の露といふ趣向とを同じやうに見られたるは口惜し、余が去夏松葉の露の歌十首をものしたるは古人の見つけざりし場所を見つけ得たりしなり（或は見つけても歌化せざりし場所）、若し花の露ならば古歌にも多くあり、又舊派の歌人も、自稱新派の歌人も、皆喜んで取る所の趣向にして、陳腐中の陳腐、厭味中の厭味なる者なり試に思へ松葉の露といへば立所に松葉に露のたまる光景を目に見れども花の露とばかりにては花は目に見えて露は目に見えず只心の中にて露を思ひやるなり、是に於てか松葉の露は全く客觀的となり、花の露は半主觀的となり、兩者其趣を異にす、然るに花の露を形容するに、松葉の露を形容

するが如き客觀的形容を用ひたりとて、實際の感は起らぬ事論を待たず、例すれば「花に置く露の玉」といひても花の露は見えぬ故矢張主觀的に思ひやらざる可からず、風が花を搖かして露の散る時、其外露の散る時は始めて露の見ゆる心地すれど、それも露の見ゆるにはあらで寧ろ露が物の上に落つる音を聞きて知る位の事ならん、音なればこれも普通の客觀的の者ならざるはいふ迄もなし、古の歌よみは固より咎むるに足らず、今の歌よみにして、これ程に客觀と主觀との區別ある兩種の露を同じやうに見られたる事かへすゞくも口惜し（黑汁一滴）

と、甚だ恐る子規翁の說或は蕪村が是等の句より養ひ得たる想にあらざるなからんかを。

市人の物うち語る露の中

蕪村は露の眞趣を解せるものかな。

狩倉の露におもたきうつぼかな

理想の句にあらざるなり狩倉の趣きを知れる者に問へ。

朝霧や畫に書く夢の人通り

我この句を讀みて、丸の內を思ひ、蘇峰が所謂「東京の朝は神の居（ま）す所なり」の一節を思ふ、而して更らに倫敦の曉を思ひ、ウエスト、ミニストルの橋上を思ふ。

朝霧や村千軒の市の音

千軒の一村、覆はれて霧の中にあり、朦朧たる霧中、さも遠く深く市立ち喧ぐ聲を聞く、渾大の感に絕ず。

子規翁この句をとつて

霧の海大きな町に出でにけり　移竹

と比す、最も妙、而かも蕪村の意を用ひたるは終の文字にあり、「聲」といはずして「音」といふ、眞に霧の感なり、太く、遠く、底に生るが如き莊嚴雄渾の音狀は霧を以て更に莊嚴に、更に神秘に伊の大をなせり。

人を取る淵はかしこか霧の中

蕪村の句として、之れを見る拙にして甚だ幼稚なるものゝみ、或は彼が初心の句ならんか。

岡の家の海より明けて野分かな

我が感じよきもの〻一つなり、野分は由來悲壯荒寒のもの、其勢をなせるの時、悲壯荒寒に、其過ぐるの後亦悲壯荒寒なり、故に野分を以て快感を起さしめむとす、寧ろ其勢の極端なる場合をとつて之れを材とし、人の感想をして一極端に馳せしめむとす、即ち芭蕉の

如き是れなり。

猪も共に吹かる〻野分かな

吹き飛ばす石は淺間の野分かな

芭蕉は間々理想若くは理想に近き極端の想を以て、快感を惹くの慣用手段となせり、蕪村の着眼は其經過後の狀態を拉し來りて、其過去の悲壯にして荒寒たる狀を忍ばさしめんと擬したると同時に其荒寒なる天地間に於て一掬の愛すべき美點を捕えんとせり、故に又曰く

麓なる我蕎麥存す野分哉

野分やんで鼠の渡る流かな

西須磨を通る野分のあしたかな

と、こゝにも亦二翁が各得意の二方面を覗ふに足るものあり。

○

門前の老婆子薪貪る野分かな

今朝よりの風に葉は裂け莖は折れ伏して、滿目の光景忌はしく狼藉たる芋圃の間を、突と行き拔けて、例の婆が家の横を奥へと通らんとすれば、折りしも例のお澤婆は、風に捩がれたる柿の實の或は青く、或は半ば黄ばみ赤らめるを、したゝかに取り入れたる重げなる箕に、枯柴の如く、骨立つたる兩腕を長く露はして掛けつ、一ト歩一ト歩に强慾の力を入れて辛くも吾家に運ばんと未だ止まぬ風に霜の薄と騷ぎ立つ白髮を吹き立たせながら此方へ來かゝりぬ。（天うつ浪の一節）

うら枯やからき目見つる漆の樹

「からき目見つる」の如き語を斯くまで淡白に用ひ、かくまで漆樹（うるし）の眞相をあらはせるものはあらざるべし、夏日漆取りが利刀を以て、

さんぐ〳〵に漆を搾れる痕は、歴々として無慘の影を止め、末枯の狀最も見るべし。

跡かくす師の行方や暮の秋

只聽得松樹背後隱々地笛聲吹響漸々近來太尉定睛看時只見一個道童倒騎著一頭黄牛横吹著一管鐵笛笑吟々地正過山來洪太尉見了便問那個道童儞從那裏來認得我麼道童不保只顧吹笛太尉連問數聲道童呵々大笑拏著鐵笛指著洪太尉說道儞來此問莫非要見天師麼太尉大驚便道儞是牧童如何得知道童笑道我早間在庵中伏天師聽得天師說道今天子差個供太尉齎擎丹詔御香到來山中宣我往東京做三千六百分羅天大醮祈禳天下瘟疫我如今乘鶴駕雲去也這早晚想是去了不在庵中儞體上去山内毒蟲猛獸極多恐傷害了儞性命太尉再問道儞不要說謊道童笑了一聲也不回應又吹著鐵笛轉過山坡去了（水滸傳一

節）

戸を叩く狸ど秋を惜みけり

結城の丈羽別業をかまへて、ひとりの老翁をしてつねに守らせけり、市中ながらも樹おひかさみ、草しげりて聊か世塵を避くるによければ、余もしばらく其所にやどりしにけり、翁は洒掃の外なすわざもなければ、孤燈のもとに念珠つまぐりて、秋の夜の長きをかこち余は奥の一間にありて、句をねり詩をうめき居けるがやがてこうしにたれば、ふとん引きかぶりて、とろ〳〵と睡らんとするほどに、廣椽のかたの雨戸を、どしどし〳〵とたゝく物するに、二三十ばかりつらねうつ音す、いとあやしく胸とどめけれど、むくと起き出で、やおら戸を開らき見るに、目にさへぎるものなし、又ふしどに入りてねぶらんとするに、はじめの如くど

し〳〵と叩く、又起き出で見るにものゝ影だになく、いと〳〵おどろ〳〵しければ、翁に告げて如何はせんなどはかりけるに、翁曰くこざめれ狸の所爲なり、又來りうつ時足下は速やかに戸を開けて逐うつべし。翁は背戸のかたより廻りて、くわ垣のもとにかくれ居て待つべしと、しもとひきそばめつゝうかゞひ居たり余も狸寐入りして持つほどに、又どし〳〵とたゝく、あはやと戸を開けば、翁もやゝと聲かけて出合けるにすべてものなければ、翁腹立ちて、隈々のこる方なくかりもとむるに、影だに見えず、かくする事連夜五日ばかりに及びければ、心疲れて今は住うべくもあらず覺えけるに、丈羽が家のおとゝなるもの來りていふ、そのもの今宵はまゐるべからず、此の曉藪下といふ所にて、里人狸の老ひたるをうち得たり、思ふに此の程あしく驚かし奉りたるは、疑

ふべくもなくシャツが所爲なり、こよひはいをやすくおはせよなど語る、はたして其夜より音なく成りけり、憎しとこそ思へ、此のほど旅のわび寐のさびしきを問ひよりたる、かれが心のいとあはれに、かりそめならぬ契りにやなど、うちなげかる、されば善空坊といへる道心者をかたらひ、布施とらせつ、ひと夜念佛して彼が菩提をとぶらひ待りぬ。(新花摘)

行秋やよき衣きたる掛り人

「とりかへばや」の中納言、吉野の宮をたよらせ給ひし程の御有樣をしるして

浮線綾の所々、秋の草をつくして縫ひたる指貫に、尾花色のざうがんの襖に、紅の打ちたるぬぎかけて、光を放ち、はなぐとめ

でたく、只今極樂のむかへありて、雲の輿よせたりとも、猶ほ留りて見まほしき御有樣なり、何事も皆口惜しく、あせ行く世の末なれど、かゝる人の物し給ひけるよと驚かれて、とばかりまもり給ふに、いとぶもてしづめて候ひ給ふ。

といへり、もと女にて渡らせ給ふる御身の、男のさまにておはす、さもありなん、かくて二三日も過ごさせ給ふる程に、月澄める夜頃、宮は中納言が琴の御こと、いとゆかしげにおぼし出でさせ給ひてや。深き夜の澄める月に、搔きならし給へる、物悲しくもおそろしき事たぐひなし、少しばかりにてさしおき給へれば、とりて彈き給へる、更に同じ調を、ふと聞きとりて、いと恐ろしきまで、のこりの音は、聞えさせつるほだしとも、このはかなき人に、敎へ置き侍りしに違はず、ひき取りたるとおぼえ侍るは、山臥の吉野の

峯の山おろしに、耳ならして待る僻耳にや、されごわざと尋ねさせ給へるよろこびには、疎う思ひ聞ゆべきにも侍らずとて、姫君の御方に渡り給ひて、かゝる人たづね物し給ひて、日ごろ物し給へるを、こなたにて物など聞え給へ、なべての人のやうには見えぬ御ありさまなり、ゆくりかに、人の怪しかるべけれど、後めたうは見えざゝめりとて、さるべきさまにひきつくろひ、曉近く出づる月の、霧わたりあはれなるに、御消息あれば、えもいはぬにほいみちて、まばゆきさまにて、おはしたれば、端近く詠め給へる姫君だち、いとはづかしくてひき入り給ふを、唯聞えんまゝに、かばかりよづかぬ御住居には、何かは尋常に、もてなし給はんも違へり、後めたくはあるまじきをとこしらへ置きて、我御身はあなたにおはしぬ。

とかける、さながらこの句の義ならずや。

戀さま〳〵願の糸の白きより

宮人懷私之願似面不同墨客乞功之情隨有應異(朗詠)

燈籠を三たびかゝげぬ露ながら

秋夜閑窓のもとに指を屈して世になき友を算ふ

したり尾の切籠かけたり宵の秋

白木の握に白紙を貼りて、秋の草花を薄樣に拔けり、尾は二尺ばかり、こも白紙を細く切りて垂れたる、風に搖ぐともなし、蕉屋の軒人のけはひ、かすか。

大文字や近江の空もたゞならね

忽有一炬登翠屏、如意嶽面烟吐青、依微火色且隱見、恍疑曉天横參星、塡坑柴薪發光明、斯須滿山輝熒々、熒々一百單三點、三畫

横斜大字成、游賞萬人相追隨、百里遙望粲離々、豈啻書聖入石妙、更驚高僧彌天奇、一時模倣勢靡然、競賈餘勇正煽々、西山慈航北妙法、看同兒孫侍膝前、韓國燈樹耻驕奢、赤壁明月遜光華、韓國赤壁何足道、海内奇觀獨堪誇、(巖垣彥明、一節)

相阿彌の宵寢起すや大文字

相阿彌は足利義政に仕へし畫工なり、銀閣寺の庭は彼が意匠に成れり。

君不見室町幕府全盛年、城北梵宇駿聳天、車馬雲簇寶池畔、微風香動萬朶蓮、東山炎文照映時、將軍倚欄興熙熙、豪華祇今成夢境、二百餘年韻事遺。(巖垣彥明、詠大文字、一節)

錦木の門をめぐりて踊かな

薔薇を戀の表象とし、菫を愛の色とするは西歐の習俗なり、我に岩

代の結松、陸奥の錦木あるにも似たらんか。

けふの細布をり〳〵の、けふの細布をり〳〵の、錦木や名たてたるらん、陸奥の忍ぶもちすり誰ゆへに亂れ初めにし我からと藻にすむ虫の音に啼て、いつまて草のいつかさて、思ひをほさん衣手の森の下露おきもせずねもせで夜半を明しては、春のながめも如何ならん、淺ましやそもいく程の身にしあれば、猶ほ待つ事の有かほにて、おもはぬ人を思ひねの夢やうつゝか寢てか覺めてか、是や戀慕の習ひなる、いたづらに過る心はおほけれど、身になす事は泪川、流れて早き月日かな流れて早き月日かな、實にや流れては妹背の中の何と聞く、妹背の中の何と聞く、吉野の山はいつくぞや、爰は又心の奥か陸奥のけふの郡の名にしおふ、細布の色こそかはれ錦木の千度百夜いたづらにくやしき頼みなりける、くや

しき頼みなりげる。(謠曲錦木)

こは細布、錦木を賣る夫婦の市人が心情を謠へるものなり、女は家の中にありて、秋の心も細布の機ものをたて機を織れば、男は錦木とり持ちて、さしたる門を叩けども、内よりこたふる事もなく、ひそかに音づるものとては、機もの〻音、秋のむしの音、したへども逝く水の、はかなき戀にあくがるゝ、そが心情あはれならずや、蕪村は即ちこを俳化したるものなり、俳化し得て更らに、いひ能はざる一種の趣味を出せり。

細腰の法師すぐろに踊りけり

當時の法師が狀寫し得て妙なり、小歌にてありけんか

京から下る小山伏、肩にから傘、お手に珠數、柴垣越に法施うけ給ふ、袖に戀の玉章

とやうの事、小耳にのこれり。

花火見えて港かましき家百戸

こは船路の旅にて遠望せる景色にやあらん、蕪村が着想抑那邊より得來る、凡骨の覗ひ知るべからざるものあり、花火を遠望する既に凡ならず、而かも旅中の意を寓す、更に非凡、而して其一眸の中に收むる所の廣大なる光景なるに至りては、遂に這の老漢を措いて前後人なし。

つゞ入やしる人に逢ふ拍子ぬけ

輕妙いふべからず、蕪村が集を繙きて、彼が擒縱に翻弄せられざるの幾人。

角力取つげの小櫛をかりの宿

旅角力の今日一日の勝負を終へて、湯上りの身體(からだ)を胸あはぬ細布に

包み露も滴るべき黑髮に、鬢の亂れ、二つ三つ無雜作に搔きあげたらむあとを止めて、櫛斜に挿せり、角力の如き頑丈ものに、やさしげなる黃楊の小櫛を配したるは例の蕪村が慣用手段なるべけれど、さるにても餘りに端唄めきたれ、唯蕪村の眞手腕は「かりの宿」にあり、これありて始めて旅角力の趣を見、隨つて端唄めける厭味をさらりと消したり。

人に似よと老のつくれる案山子哉

この案山子、老が苦心の後に成れるもの、最も眞面目にして、最も滑稽ならずや、つくづく案山子の相貌を思へば、注意周到にして緻密、精細に、緻密精細にして益〻滑稽に、先笑を禁じ得ざるものあり、之れと同時に老が眞面目にして質直朴訥なるの狀、躍如として目にあり、兩者相對し來れば趣味津々、盡る所を知らず、眞に內容充實の句なり。

知人の鳴子ならして通りけり

鳴子のがら〳〵と音するに、フト目を放てば我が稗田をあさる雀の一群、囀の聲、羽の音、けた〻ましう、一ちぎれの雲の風に飛ぶがごと、彼方に去りぬ、こは誰がしわざぞと見れば、隣村の孫兵衞、心地よげに雀の行衞を眺めつ、手鼻一とす〻りして、彼方へ行くめり。

村々の寢ごころ更けぬ落し水

ゆふべ〳〵に、里の子が泣き聲とむる、川向ふの狸火も今は消えて、庚申塚の燈籠油盡きなんとす、犬の聲は一村さきなるべし、鹿は吾が後ろに近し、月なく星動かず、田毎に落ち行く水の聞く耳に隨つて、或は高く或は低く、呂律繼續、自然の眞趣を語れり。

旅人に我家しらるゝ砧かな

仲國が寮の御馬たまはりて、明月に鞭をあげ、小鹿鳴く嵯峨野の奥に、小督の殿をたづねたる其趣きにも似たるかな、それは想夫戀の爪音に尋ぬる人の隱れ家をもとめ、これは砧の槌音に旅の一夜を願ふ、さればいたいけしたる小女房などの、枝折戸細目に顏ばかりさし出でて、いらへせん程のやさしみはあらざめれど、姉樣被りせる古嫁が、襷のまゝに、甲斐々々しきもてなし振りの鄙びたるをかしみはあるべし。

新米もまだ草の實の匂ひかな

「新米」の如きは最も俗に落ち易きものなり、蕪村より、この消息を知る、乃ち他をいひて人事の外に趣を求む、この句何れに向つてか手足をつけむ。

戀わたる鹿や臥猪の枕もと

秋の野に最も女性的の生物を求むれば鹿の如きは先づ其第一指を屈すべきものなるべし、秋の野に最も男性的の生物を求むれば猪の如きは先づ其第一指を屈すべきものなるべし、この兩性の生物を拉し來りて、自然の興趣を詠ず、一つは有心、一つは無心。

鵯のこぼし去ぬる實のあかき

鵯の聲一つ二つ、友呼ぶにやあらむ、疳走りに聞えしかしばらくは音もあらず、書に倦めるものから、そと我が書院の明り障子押しやれば、青羽の灰ひかへりたらん色したる小さき鳥が、頭、逆毛立ちて、ふためき去りぬ、前庭の踏石の上、南天の實のほろ〳〵とこぼれたるも、靜けしや。

雁鳴くや舟に魚燒く琵琶湖上

鮮(あざ)らかなる鮒、竹串にさし徹ほして、釣り上ぐる側より燒く、琵琶

湖上星あきらかに、馬場の漁家灯稀なり、舟歌休み、櫓の音絶ゆ、唯我が糸垂るゝ音、魚の水に潑溂たる聲、靜かさを破るあるのみ、個中の消息我獨り解す、偶々一つらの雁あり、啼いて過ぎ、過ぎて啼く、東坡能く唯今唯鵬鵠の啼く有るを知る、而かも未だ別に這の淡枯の趣あるを知らず。

手斧うつ音も木深し啄木鳥

大原山に方丈の庵しつらひて世を遁れたる長明がいへりし、白妙の砧打つべき何某のわたりならねど、こゝには杣の夜こめて、打つ斧の音も、丁々として悲しう聞えたるなど、あるべき境界の趣きなり。

小百姓鶉取る老となりにけり

とりて燒き、燒きて喰ひつゝ、鶉なくなる深草の里と歎きしは元政坊なりしか、かのわたりの百姓なるべし、若き頃は四斗入りの米俵

かるゞゝと片手にさし上げて、庄屋の若を驚かせし事もありしを、よる年の今は鍬一挺が肩に重く、餌さし竿を杖にも恃みたき程の老が、たつきと樂みをかねての鶉取り、處がらなればか、いやしからず。

鯊釣りの小舟漕なる窓の前

試みに一軸の南畫を想起せよ、幾層の修竹一村落を點綴す、酒帘高低一二竿、白屋遠近七八點、前面一條の流を横ふ、中流に漁舟あり、枻を鼓するに擬す、沿岸の一茅舍、圓窓を穿つて、水に臨む、内に仙骨あり、ノ〳〵兩鬚を蓄ふ、半身斜に坐して、怡色閑なり。

河鹿啼く袖なつかしき火打石

「やまめ」すむ所、また河鹿すむ、「やまめ」は水淺く、流急に、石圓く苔滑らかなる溪谷に居る、其名から既に雅趣あり、寒つて巖上に踞

し、鈎を垂れて、徐ろに河鹿を聞く、偶々糸閑あり、乃ち煙管を執りて、一喫の快を貪らむとす、袖中を探れば自ら火打石のあるあり。

蕣にうすきゆかりの木槿哉

蕪村が句には色彩上に意を注げるもの多し、この句の如きも其一つなり、其形其色木槿の蕣に甚だ彷彿たるものあり、蕪村乃ち木槿の花の色彩美を描かんとす、他の朝顔をかり來りて、艶曲に之れを表はせり、讀者は、木槿の紫だちたると朝顔の水にも濡れたらんやうなる紫と、兩々相對し來りて無量の趣味を喚起するに難からざるべし。

蕪村屢〻色を描くに這の手段を以てせり、

海棠や白粉に紅をあやまてる

朝貌や一輪深き淵の色

海棠が夕の薄化粧をいはゞ脂粉の上ほのかに紅にほはせたる西施が浴後のさまに似たらんか、朝貌が朝の濃艶をあげつらはゞ、澗水堪えて藍の如しといひけむ僧の口吻を忍ばしむるものあり。

わくらはの梢あやまつ林檎かな

果實中最も色彩の美を極めたるものは恐らく林檎なるべし、紅、綠、黄、樺、あらゆる色の美を鎔めたる、さながら神の秋の草花など染め出せる時に用ひたらん繪具皿にも似たり、病葉また色彩の美を極む、殊に圓く光澤やかに、ちゞかまりたるなど、木末に葉隱くれて見ゆ、中々に林檎とあやまたることもあるべし。

朝顔や手拭の端の藍をかこつ

今朝咲き出でたる朝貌の露深う藍をたゝえたる、我がもてる手拭の端も、かゝらむ色ならましかばなど、流石に口惜しう羨やまるゝも

心地よしや、

彼が俳句の側に苦心したる徑路は同時にまた、繪畫の側にも意を注ぎたる點なりき、即ち彼れが夜間燈色の映じたる樹を繪畫の上に寫さんと試みし時は俳句の上にも

手燭して色失へる黄菊かな

などの句を得たりし時なりき、或は時間と距離の關係より繪畫に濃淡陰影を施さんと企てつゝ、一方俳句の上に

山は暮れ野はたそがれの芒哉

を得、其他春の木の芽の色を樹によりて染め分けんとし數色の配合を妙ならしめむとしたりしが如き、甚だ俳句上に其インフリユエンスの及べるを見るに足るものあり、其所々につきて論ぜり。

稚子の寺なつかしむいてふかな

本堂の前の廣庭、四つばかりなる稚子の四つン這ひになりて、裾高々と端打り、でぶ〳〵と太りたる足を、あやしく運ばせつ、ひら〳〵と風に散りくる銀杏葉を、樂しげに追ひ行くさま目に見るが如し、これらの句は全く其裏面に饒多の趣味を藏す。

紅葉してそれも散り行櫻かな

西塔の武藏坊辨慶諷つて曰く、春は櫻の流るれば吉野川とは名づけたり、秋は紅葉の流るれば龍田川とも名づけたり、今年も秋になりぬれば、法師も紅葉て流れけり、と這中の消息這の今樣につきたり。

里人はさこもおもはし女郎花

彼の岡に草苅る男の子心せよと詠はまほしき趣きなり、さばれまた都の人の心にもさとも思はぬをかしさもあるなり、雲雀山の花賣が、朝もよひ紀の關守が手つか弓、いるさか歸るさか、いづれにて

もましませ、などや花は召されぬ、あら花すかずの人や、花すかぬ人ぞおかしきと嘲り去りし詞のしたはしきや。

黄に咲くは何の花ぞも蓼の中

そのそこに白く咲けるは何の花ぞもと詠みけむ古歌の面影なり、野外の眞趣この間にあり。

白菊やかゝる目出度色はなくて

「かゝる目出度色はなくて」一本調子に言ひ去れるあたり最もこの句の特色なり、殊に結句を字あまりとして屈折を作りたる、更に這の句の重みをなし、白菊に對して莊重の感をなさしむ。

氣みじかに秋を見せけり唐からし

めぐる日の春に遲いとて老木の梅が花まちかねて、鶯の來ては朝寢を起しける、さりとは氣みじかな、今帶しめて行くわいな、ほ

うほけけうとい人さんじや、(端唄、めぐる日)

これにはうらうえの秋の半もまたなくに眞ッ赤に疳癪面を見せたる、氣みじかの唐辛子かな。

根に歸る花や吉野の蕎麥畠

花は根に鳥は古巣に歸るなり、春の行衞を知る人ぞなきと讀みけむ人のさても心なや、吉野の花は根に歸へれども、春の行衞は秋の野に、蕎麥の錦を織りなして、こゝには春のあるものを。

油買ふて戻る家路の落穗かな

櫛卷頭の蓬々として夕の風に亂れつゝ、襤褸(ぼろ)なせる細布の身にあはぬも寒げなり、提げもてる油徳利の繩のはしにぶら〳〵と下りて、疲れたる足の運にあひたり、野路のかへさ、落穗の二つ三つちらばりたる、より〳〵拾ひ行くもあはれ。

柳散り清水涸れ石ころ〳〵

以下二節は曾て初心の者に示せる所のものなり、借りてこゝに錄す、これは其儘の即景を詠んだ句である、先づこの景色を想像して見ると、秋の夕日は力なく向ふの岸に落ちて、一條の河、水涸れ〻〻に、淺き所の大方は石原で、此方の岸の蛇籠は稍〻崩れかけて、離離たる黄草、草苺、野茨も枯れ草に蔽へたる邊りに一本の柳、是も梳る髪もすれ〳〵になつて、枝は大方隙間がちに散りかけてゐる、川の眞中は少しばかりの出洲になつて、其處に短かき薄が一ぱいに生えてゐるでもあらうか、晩鴉二三遠く〻〻、低き山の方に飛んでいつたでもあらうか、雪舟の一幅の山水畫に能くこの景色がある、然るに蕪村は此の景色を見て、薄や、野茨や、晩鴉や、蛇籠や、出淵や、其んなものを採用せずに、數多きもの〻中から散る柳と、涸

水と、點々たる石とを採用して、凡てのものを並べたてるより、より多くの趣味を含蓄させたのである、重ね〻〻も注意を願ひたい、此處が眼目である、蕪村は何故に此の三つのものを採つたのであるか、而して此の句は何故に然く能く其秋寂びたる景色を表はしたのであるか。

これを句材の調和といふ、散柳の淋しき趣味と、涸水の衰へたる趣味と、點石の簡明なる趣味と、此の三つの趣味が合して淋しく哀れなる趣味を完成し、讀者をして夫れより以上の景致をも聯想せしむるに至つたのである、さらば趣味の調和、即ち句材の調和とは如何なるものであらうか、諸君は鬼女の面を見て恐ろしい感じがするであらう、そはこの面の耳目鼻口が凡て恐ろしい形の調和をなして居るからである、嶮しく鋭ごき角、縮れて硬き髪の毛、鋭く尖りたる

鼻、陰に尖れる眼、そを包む如く太く叢れる眉毛、窪みて削りたる如き頰、其れに對して兩耳に割れたる口、嵯峨たる岩石の如き齒、凡て顏の道具は一つ々々に見ても恐ろしき分子であるのに、之れ等を合はしたのであるから益〻恐ろしく見えるのである、又諸君は二滿三平（おたムく）の面を見て柔しく平和な感じがするであらう、これは其低く圓き鼻、彎形の細き目と眉、艶やかに肥えたる圓き頰、行儀よく圓き額に添ひたる髮の生際、小さき紅の口、柔らかに肥えたる二重の頤等が全面に平和なる調和を保てるが故なのである、蓋し三角形の如き鋭どく尖りたる形は平和を缺くので、寧ろ嶮しき感じがするから、目や鼻や口や角やの三角形的なのは即ち鬼となる、又圓形は平和を意味するとは西洋の諺にもある如く、凡て圓形的を以て作りたる顏は即ち二滿三平となる。

此故に鬼の顏に二滿三平の鼻を付けたらば非常な不調和で恐ろしくもならねば、第一に滑稽になつて仕舞ふ、二滿三平の顏に鬼の口を付けても同じく不調和である、さうして見ると、鬼は飽くまでも三角形、二滿三平は飽くまでも圓形で畫かねばならぬ、三角と圓形と混合すれば斯る場合には不調和を來たすのである、さればこの蕪村の句の散り柳と、涸水と、點石との三つを配合したのは即ち淋しく衰へたる趣味の調和の爲めで、彼の鬼の三角に於ける如く、二滿三平の圓形に於けるが如きと同一筆法であるといふことが明らかであらう。

茨老すゝき瘦萩おほつかな

東坡が赤壁の賦は何で有名かといへば、山高月小石出水湧といふ四字があるからである、これは實に面白い例である、山が高い、月が

小さい、石が出て、水が湧いて居る、其れ丈けの事である、然るに其れ丈けの事がどうして面白いかといふと、自然の景色がよく表はれて居るからである、而して一字として無理がない、自然のまゝである、細工がない巧妙を衒はぬ、こゝが面白い所である若し余等の如き文に拙き者が此れを書くとした場合にはどうであらう、山の上に松もあらう、月の傍らに雲か星かどちかあつたであらう、余はそんなものが書きたくなる即ち「山は峻峭として劍の如く峙ち、一輪の月は高松の梢に墮つ、」などと氣取るであらう、そうすれば何が何んだかわからなくなる、文章でない漢語の臚列である、又た石出づ水湧くといふ所を余等はこの簡單なる語に慊らずして、巉巖磥砢とか、飛泉倒懸とかいふに違ひない、さうすると、これも詩語碎金を見れば、誰れでも書ける文句で畢竟無意味のものになる、巖とも磥

砢とも言はんでも石出づといへば其れで充分わかる、そこが言ふに言はれぬ面白い所があるのだ、この句の如きもそれだ、暮秋郊外の景はあり〳〵と目に見るやうである、其景物中のヒントを捕らへ來つた手段は「柳散り清水涸れ石ところ〳〵」と少しも撰ぶ所がない、三唱三度其興を新らたにする所がある、何故であるか。

即ち寫生である、文字上の形容もせず、修飾もせず、ありのまゝの事を見た通りに言ふたから面白い、妙文だ、東坡は寫生の極秘を知つて居つたのである、左傳の舟中落指可掬の語は壓卷の好文字であると世人は稱賛するが、考へて見ると是れも寫生であるやうである

上舷下舷舟を爭ふ、水に入つたものは舷につかまつて上がらうとする、舟中の人は皆んなに上がられては舟が重くなつて沈むから入れまいために其攫つた指を刀で斫る、故に指がこぼれて、舟の中に殘

り、人は沈んでしまう、此の指は手で掬ひ上げる程こぼれてあるといふので、ツマリ寫生的である、バイロンの詩に攫むが如き闇さといふ語がある、眞の咫尺を辨せざる暗夜に歩行く時は何かに突き當りはしまいかと心配して手を前に出して物を攫むが如き素振りで行く、此の心持ちをいふたので、これも寫生であらう、さうして見ると古今東西の文章の妙致といふのは寫生にある、此れまで書いて考へて見ると其れは一々當然の事で、文章はほんとうの事を書くのが目的であつたので、修飾形容は凡て後から出來たのである、蕪村の茨老いすゝき枯れ萩おぼつかな、の句と芭蕉の枯枝に烏のとまりたるや秋のくれの句は共にこの二人が新風を起した劈頭第一の句である、元祿調の特色、天明調の特色、其れが即ち寫生であるといふに至つては益〻愉快ではないか、余は一度考へ此に及んで、其れからい

ろいろの妙文、妙歌、妙句といふものを思ひ出して見ると、不思議にも开は悉く寫生になつて居る、何故に前人が此の寫生といふ事を唱へなかつたか、要するに寫生といふ熟語がなかつたけれども古來の人は知らず〳〵寫生をやつて居つたのである、此の稿を書いてゐる時に葉書が一枚飛び込んだ、見れば、余の書齋を出でて伊豆に保養に行つた簑虫の音信である、全文を左に掲げるが甚だ面白い寫生である。

蕖葺の敎會堂(大森邊)

梨棚を作つて居た、梨の若葉の風にもまるゝ下で(川崎邊)

畑一面葱の坊主

滿山三五尺の松の並木で、其並木松が皆んな花(神奈川まで)

遊廓の鯉のぼり(戸塚宿)

座像五尺の石地藏、伊豆には昔から石工の名人が出るそうだ（修善寺）

五月三日　　みのむし

冬

はつ冬に香花いとなむ穢多が宿

穢多が宿で香花をいとなむなどは、どちかといへばあまり感じのいい方ではない、穢多が宿といふ既に穢ない感じがする、其穢い場所をかざるのに、金銀朱綠で彩つた阿彌陀佛の扉を開らいて、莫蓙を敷きつめた餘り廣からぬ座敷に、男女の一團が車座をなして、鉦を叩いてゐるなどは餘程俗な趣きである、然るに唯これが初冬なるだけ、それだけ、しまつた感じがする、それと同時に香花をいとなむなどいつても、至極簡單に淡白に、穢多が宿の穢さなど餘り意識に上らない、初冬の氣嚴に、空朗らかなる感は慥かに其凡ての醜と其凡ての俗とを覆ふて餘りあるものであらう。

井のもとへ薄刄を落す寒さかな

井端は勿論寒い感じに相違ない、薄刄また寒さの感をひくに堪えたものである、其寒い感じの強い場所へ、其寒い感じの強いものを落すといふ現在の動作であるから、敢て其音を想像せずとも、敢て其然る動作の前後に想像を逞うする事をせずとも、寒さの感は充分であらう、發句が若し題意を盡し得たならば、そうして題意を言ひ盡すことが發句の目的であるならば、これらの句は「寒さ」の句として成効したものといはねばならん、けれども發句は決して題意を説明するものではない、題は發句が用うべき一材料を與へたに過ぎない、發句其者の本領は天籟の聲をうつさんとするのである、自然を離るべからざるものである、然るにこの句の如きは、甚だ説明に近い者である、「寒さ」の感はかゝるものだといはぬばかりの道具立てである、即ちあまりに作り過ぎた句である、きわど過ぎた句である、蕪村が巧を弄して失敗に歸したものは一二に止らない、そうしてこれも其一つである、唯蕪村が用意を見るべきは「井のもとに」といはずして「井のもとへ」といつた點である、丁度井端といふ事があまりに、きわどいのを避けて、ぼんやりと井のあたりといつた所は飽くまで其弱點を自らも知つてゐた事を證すると同時に、其心を用ひた點は注意する價があらう。

借り具足われにならじまぬ寒さかな

「寒さ」の感の句としては實に得難いものである、若しこれを佐野常世の如き貧乏武士が、すは鎌倉といふので着るべき具足もない處から、借着なしたものと想像するならばこの「寒さ」は單純なる「寒さ」の感でなく、いろんな俗情が纏綿した「寒さ」になるであらう、する

とこの「寒さ」にも厭味が出來て甚だ面白からぬ事にならう、がこの借り着の具足は唯ほんの戯であるとか、知己の間の借り物であるとか、極く平淡な意味なのである、隨つて「われになじまぬ」といふ詞の如きも、鎌倉海老の胴殼に河豚を詰め込んだ位の感で、餘程面白い所がある、するとこの「寒さ」の如きも至極普通な「寒さ」の感じで、其淡白の間にいふにいはれない詩趣を見出すであらう、眞面目でもない、そうかというて滑稽でもない、其平凡の中に「寒さ」の眞味を捕へてゐる。

飛驒山の質屋ことしぬ夜半の冬

海道筋で一番淋しいのは中山道の道中であらう、殊に木曾あたりと來たら鬱蒼たる木立の間から晝星を見ながら行くやうな所もある、勿論たづきも知らぬ呼ぶ子鳥、はては猿（ましら）の聲の外、杣伐る斧の音だ

にしない、飛彈山は木曾に次いでの物淋しい道筋である、山中小さい木賃宿、馬喰宿などが五六點接して細い煙をたてゝ居る所がある其中に質屋が交つてゐるのは一寸と變なやうであるが、其實當時の旅を思ふとなくては叶はぬものであつたらう這那心細い道中をする旅客の事であるから、或は病氣の爲めに旅籠に病就いて、路銀をなくした上、身に着けてゐるものを脱がねばならぬやうな場合もあらう、或は山賊、護摩の灰の爲めに金をなくして、さて長途の旅を如何ともする事が出來ないで、遂には手荷物の處分を講ぜなくてはならん場合もあるだらう、これらの爲めには質屋は少くとも木賃宿と相並らんで必要であつたらうのみならず、他の一面には山賊野盜が旅客を剝いだ仕末方は是非質屋の任務であつたらうしまた質屋の重なる商賣は寧ろ、この方面にあつたかも知れない、斯ういふ種類の

質屋であつて見れば勿論夜の更くるまでも起きてゐた事であつたらうが、今我が過ぐる頃は既に更闌けて、この落し屋すら寢しづまつてゐたといふので、餘程冬夜の感に切實である。

冬川や誰が引きすてし赤蕪

水落ち石露はれて、處々に傘の骨ばかりになつたのや、菜つ葉の赤らびたのなどが、自づからなる、しがらみをなしてゐる、そこにまだ葉の青々とした土も水に洗はれないでゐるやうな、引きすてたばかりの赤蕪が、引つかゝつてゐたのである、この荒涼たる寒殺の景物中に最も目立つた色を、もつて來たのは冬川の感を最も強めたものである。

寒月や鋸岩のあからさま

直ちに以て伊豆の鋸山などを想像するのも面白いであらう、天斧を

下して刻みなした如く、劍峰青空を劈いてゐるのもあれば、鐵壁風を遮つて、突つ立ちてゐるのもある、青龍刀を並らべて、敵を搆へてゐるらしいのもあれば櫛を連らねて、矢を防いでゐるらしいのもある、一輪の寒月小さく中天に懸つて、鋸山の陣形歷々指示の中にある。

時雨るゝや鼠のわたる琴の上

一般にこの句は夜の感にしてゐるらしい、現に先輩諸氏の如きも其說である、殊に「鼠といふより夜の景たるはいふまでもない」とまで斷定した人々もゐる、しかしこの句を論ずる前に當つて、畫であるか夜であるかの點は是非一應の詮義を經なければならぬ問題であつたらうと思ふ、鼠があるから夜の有樣だなどは、餘りに獨斷的である、予の如きは晝間尤も閑靜なる光景だと信じてゐる、子規翁は

この句の主意を音の配合にあるのだといつてゐる、即ち鼠が琴の上をわたつて、チリン〳〵といふ音をさせたのと、時雨の蕭々たる聲とがある調和をなした音樂的趣味だといつてゐる、これらも夜の景だと考へた所から起つた說であらう、勿論夜の感にするならば、鼠其者は見ないで、音のみを聞くといふのは尤もな考へである、けれども夜琴が疊の上などに横へられて置かれてあらうとは思ひもよらぬ特別な場合で、普通ならば、ごつかにたてかけられてある笠だ、立てかけられてある琴ならば鼠がそれを下りるのに、チリン〳〵は餘程變であらう、して見るとこの句は晝夜の如何に拘はらず、見た所の句で、聞いた所の句でないと考へるのが當然である若し狀景の句であるとするならば、晝夜何れが時雨の感に適切であらう、靜閑人なき座敷の床の一隅に立てかけられたる琴の上を晝間鼠のすらすらと走るなど、いかにも時雨の淋しみをあらはしてはゐないだらうか。

子を遣ふ狸もあらむ小夜時雨

蕪村が好んで描いた俳畫の俤であらう、一貫の破れ笠にそぼふる時雨をいとふて、通帳に油德利をぶら提げた、子狸が尾花枯れ伏す細道を、とぼ〳〵とやつてゐる、遠く背景には、蘆ぐろの二つ三つもあつて、其くろくろとの間から狸の半身ばかりが見えてゐる。斯く畫にしてしまつては流石に畫だけの面白味だけれどこの句の妙は中七字にあるので「狸もあらむ」と想像した處に小夜時雨の趣はあらはれてゐるのである。

こがらしやひたと躓く戻り馬

馬の躓き易いのは下り坂で、尤も馬の苦むのも下り坂である、驛か

ら驛へ荷を運んだか、人を送つたかして、からだが、なへになへた、弱馬が今下りかゝつた坂道で、蕭然に木枯が吹き起つたのであるから、堪まらない、目くらみ、足よろめいて、ひたと、躓き止つた荒涼たる光景である、馬の鬣は逆に揉まれて、吹きすさむ風は馬の脚もとで、渦を捲いて、其鼻づらを劈いてゐる、三日の月淡く夕の空にかゝつて、麓の方から馬子唄が斷續とし破笛のやうに聞える。といふて見たが是は廣野としても面白味が減じない樣だ

駒のやせたに高荷をつけて、これで下り坂よ鈴鹿の山をしかも月夜か闇の夜に。

木枯や釘の頭を戸に怒る

裏の柿の樹には高々と竿を結びつけてゐる、その上に研ぎ澄ました利鎌が、吹き寄する風の胴中を切り劈いて、あたりには目もくれず、敵の眞向うに立つてゐる、屋の棟には、風除けの白幣が、はたはたと魔を追ふかの如く、はためいて威風あたりを拂つてゐる、けれども風軍の勢中々に屈すべくもない、板びさしは寸斷に折れて、瓦は微塵に碎ける、障子は吹き飛ばされて、墻は倒れる、折戸がガタンガタンと嬲られて居るので、其度毎に突き出た釘の頭にぶつ突かる、之れを戸に怒るといふたのであらう。

大雪となりけり關のこざし時

足柄か鈴鹿か、くきだ、白河、衣の關、いづれもこの感に乘るであらうが、勿來の關などといへば最も大雪の趣には面白いであらう、とぼ〳〵と降る雪を冒して、雪の山路を下りつ上りつ、今この關所にかゝつた頃、日はもう漸く暮れて、正に關門は鎖されんとしてゐるのである、雪は降り積つて脛を沒するに至り、日は落ちて前後を

忘ずるに至る、實に這の旅客の爲めには、孟嘗君が函谷關に扉を開かんとした感であらう。

嵐雪に蒲團きせたり雪の宿

京都洛外の景色をいはゞ、嵐山、大堰川の二つを取り除く事は出來まい恰かも洛中に東山、鴨川の二つがあるかのやうなものであらう、嵐雪が、蒲團着て寢たる姿や東山、と詠じて以來、東山には寢姿山の名さへ出來てゐる、蕪村は直ちにとつて、「嵐雪」としてしまつた、今ではこの「嵐雪」の下が圓山公園で、其好位置は也阿彌ホテルなどといふ異人旅館の占領になつてゐるので、三十六峰秋色美などいつた頃から見れば餘程殺風景なものであらう、が何しろ、北は如意嶽に起つて、南稻荷三ゲ峰に終る三十六峰の總稱なのであると聞いても、見ない人まで、雪の東山を想像するに難かるまい、蕪村

が宿つた處は上京の北部であつたらう、高瀨川の邊（はとり）、木屋町などであるまいか。

石に詩を題して過ぐる枯野哉

一簑一笠の風客が那須野あたりの通りすがら、殺生石などに一詩を題して飄然と去つた趣であらう、元來この句は白氏などから得來つたものであらうが其趣は大に異つてゐる、林間煖酒燒紅葉、石上題詩拂綠苔、なかといふ、いやに仙人じみた、有目的のものではない、全然無目的に、通りすがらの一興に過ぎない、「題して過ぐる」の中七字に妙味がある、假令はゞ惠遠が虎溪を過ぎた位な極無意識の處に面白味がある、既に拍手三笑に至つては太俗だ、況んや白氏の如く拍手三笑の境に到らんが爲めに、詩を題するが如きは俗の俗なるものであらう。

三日月も罠にかゝりて枯野かな

草より出でて草に入る武藏野などの感であらう、廣茫たる枯野の果、三日月僅かに其頭を地平線上に擡げて、狐はからむ罠の内に、其首を入れてゐる、夕暮淋しき冬枯の野のさまであらう、人或はこの句を月並といふかも知れない、それらの人は遂にウイットの何者かを解せないものである、同時に月並の何たるをも知らなければ、又詩の何たるやも知らないものである、三日月が罠にかゝるといふのは洒落でない、口合ひでない、眞のウイットである、試に至つて實景に接せよ、思ひ半に過ぐるものがあるだらう。

氷踏で夙に驗者の木履かな

夜のまだ引き明けといふに、葛城あたりから下つて來た修驗者であらう、尺餘になれる木履を、踏みしめて、氷を踏んで下山する樣は

中々感じがいゝ。

松明振りて船橋渡る夜の霜

一連の舟橋、眞白に霜が下りて、夜目にもはつきりと知らるゝ程である、この上を松明を振り〳〵通るさまは其の反映如何にも美しそうでないか、空に纓絡を下げたやうな星の數で、月の三十日でもあらう、星の影は氷れるやうに光つてゐる、闇を破つて行く松明(まつ)あかり、これに映さるゝ霜、如何にも美しい。

一しきり矢種の盡るあられかな

實朝が歌の

もの〳〵ふの矢なみつくらふ籠手の上に霰たばしる那須の篠原

は其行爲が現在であるために面白味があり、蕪村の句は其事柄が過去である爲めに面白い、前者が過去の動作をいつたものであつたな

ら僅かに歴史的の句に過ぎなくて、繪畫以上の感は與へない、後者が現在の趣きであつたなら、其激しさの度合を制限されて、想像は固定して仕舞ふのである、彼の歌を三嘆する歌人があつたなら、この發句の趣味も同様に解せらるべき筈である。

炭賣に日の暮れかゝる師走かな

蕪村は京都の方にゐたから、彼が見た炭賣も亦京都あたりの炭賣であらう、八瀬小原あたりから出る炭賣は、東京あたりで見るやうに、車に載つけたり、檐ひ棒で、前と後ろに檐ついだり、なンどするのではなくて、脊に高々と脊負つてゐるのである、だから後ろから見たら、全然で炭に足が付いて歩行いて爲るやうである、蕪村はこの炭賣の後ろに冬の暮れかゝつた弱々とした日脚が射てゐる至極靜かな有様を諷つたものであらう。

蕪村は常に「松風の世に立ち騒く師走哉」などいふ可き繁忙なる狀態を寫さんとする半面に靜閑なる場合を捕えて却つて、師走の有様を穿たんする傾がある、この慣用手段は野分に於て五月雨に於て其他所々に於て、我々は屢〻見る處であるが其度毎に、いつも目新らしい感がする。

うぐひすの啼や師走の羅生門

蜉蝣ひとつ障子に羽うつ師生哉

皆是れ彼が例の手段である、樗良の如きは實に彼が境界に似たるものを捕へんとして失敗せるものである。

憂きことは知らじ師走の鳶鴉

全然月並調である、蕪村が慣用手段また中々に學び易からぬ處がある。

鍋敷に山家集あり冬籠

爐に藥喰の鍋などかけて、傍ら山家集かなんかを見てゐたのであらう。

鍋のものはよごろに煮えて、さて下ろさうといふのに差當りそこらに鍋敷になりそうなものもない、立つて臺所を探さん程の面倒を見るまでもなく、有合の山家集、これ屈强のものと、早速鍋敷にしたわけであらうが、餘程其物臭ひ單簡な處に冬籠の趣きがあらはれてゐる、中七字「山家集あり」とした處に、其あたりなにをがなと見廻して、山家集のあるのに、これ屈强と氣がついた處が見えて面白い。

冬籠心の奥のよしの山

「霞の奥の吉野山」を轉化したのであらう、冬籠をして心靜かに吉野

山などの事を忍んでゐる趣きらしいが、火桶に櫻を焚いてゐるなどといふ俗宗近の說を聞かんまでも面白からぬ句だ、こは例の調子を主にした句であらうこれとは反對で

冬ごもりそれともみえず三輪の山杉の葉白く雪のふれれば

などは、屏風に三輪の山に雪のふつてゐる所が描いてあるのを、見て詠んだのであるが、この歌の方が大分振つてゐる。

口切の隣も飯のけふりかな

此處（こゝ）にいふけふ、「けふり」は飯を焚時の湯氣をいつたのであらう。

口切や湯氣たゞならぬ臺所

などいふ趣に對して、隣にも飯の湯氣がほつぽと立ちあがつてゐるといふ、この兩者の反映は餘程趣味がある、いやに雅ばつて、口切などといな奴は俗に墮ち易いものであるが、斯ういつて去（の）けた所

に、俳句本來の趣味をあらはしてゐる。

武者振りのひげつくりせよ土大根

二叉大根の兩股を踏みひろげて、頭には大童の青葉を亂し、土色なせる鐵の鎧を被り、塊のほとりに、すつくと立ちたる其骨柄、天晴、武者振り、八字の兩鬚、ひげつくりせまほしい有樣である。

麥蒔の魍魎長き夕日かな

夕の日射の案山子の如き畑の人を照らして、凍てたる土に其影を印してゐる、冬の田園の景はこの一句に盡きてゐる。

貌見せや夜着をはなるゝ妹が許

この句は當時の風流才子が面影を描したものであらう、其當時、十一月朔日の顏見世となつたら、最負俳優の見物には是非行つて遣るべき義理があるので、わきて通人などいへるものになると、貧乏

質に入れてまで行つてやらねばならなかつた慣はしであつた、この句の主人公なども所謂通人で、一方には隨分憎い妹もあつたらうといふので、其妹許泊つてゐたのを、今朝はまた顏見世に出かけなくてはならぬといふ、一寸此處後朝の心づらい所をいつたのであらう、であるから前書に「題戀」として、「貌見せや餘儀なく」といふべきを「夜着」に緣語を求めて、「はなるゝ」とうけたとは牽强附會か

守信と瓢にかけよ鉢叩

其ぶら提げてゐる瓢へ守信と書けよ、さすればそれは守信の落欵を見たやうになつて、全然で守信が畫に書いた鉢叩を見るやうであるといふ意なのであらう、蕪村が曾て「探題一字」雁といふ前書で

一行の雁や端山に月を印す

といふの作つた事があつたが、彼が畫家であつた丈けに能く人の見

つけない面白い處を見てゐるやうである。

寒垢離やいさまゐりそふ一手桶

「いざまゐらそふ」一手桶と打ち興じた所に面白味がある、「まゐりそふ」は「まゐらそふ」に音轉じ來つて、今では少し耳遠いが、本來は斯くあるべきである。

提灯の猶ほあはれなり寒念佛

寒念佛の聲位あはれなものはなからう、されば聞く耳には。

極樂の近道いくつ寒念佛

などと響きもしよう、この寒念佛がだん〳〵遠ざかつて、行つて、益〻あはれに聞えてゐたのが、今は聲が消えて唯其提げてゐた提灯の灯ばかしが小さく見えてゐる、其あはれさは一層であるといふ句意であらう、因より寒念佛は大きな聲で唱えるのではないから、少し過ぐれば直ぐ其聲は聞えなくなるのである、即ちこの句の前身は

細道になり行く聲や寒念佛

などであらう。

樵捨るとし木の枝に雀かな

年木は來年の料に年内に樵る薪の事である、此處では年木にしやうといふ其木の枝に雀がとまつてゐるといふ、其時の感をいつたものであるが、「樵捨」るといつた所に「鉢木」の松を切る程でもないが、不言不語の間に、年の暮といふ感も多少あつて、あはれな趣がある。

小野の炭匂ふ火桶のなめかな

こは畫賛の句で、前書に「老女の火をふき居る畫に」とある、小野の小町が故蹟は種々説があつて、一決しないが此處にいへる小野の里

といふのは、山城の愛宕郡にある小野寺界隈一帶の地の總稱であらう、即ち比叡山西面一圓の里の名で、小町の靈が「あなめ〳〵」の歌を讀んだのも、此處の市原野での事だと、いひ傳へてゐる位である、蕪村はこの傳說からこの句を得たので、火を吹いて居る老女を小町に見たてゝ、「あなめ〳〵」の歌を直ちに、破火桶の形容に傳用して來たのである。

炭俵ます穗の芒見付けたり

炭俵から炭を一つより二つとり、とり盡して、扨て其終りに俵の底敷がある、其底敷を拔いて見たらば、ます穗の芒が出て來たといふ、其なつかしい心地を、「見付けたり」といつたのである、この底敷由來趣味のあるもので小枝の薪柴を曲がねたのもあれば、萱だの篠だの乃至眞葛なんど、其あたりに有合せたものを曲がねて、作つたのもある、其中に穗芒が目つかつたといふたのである。

埋火のありこは見えて母の側

母の側に、寄り添ふて、昔々のかち〳〵山かなんかを、つれ〴〵と聞いてゐた稚き時の事を思ひ出した句であらう、ありとは見えて箒木の、などより轉じて母の側と持て來たので埋火に對して昔の母の俤がアリ々々と目に浮んだ趣である。

宿かへて火うれしき在所

這度引き越して來た家は火燵の拔いてある場所が如何にも氣に入つたといふ意である、老人がほく〳〵とうれしげな顏をしてゐる樣が目に見るやうである。

炭竈の邊りしづけき木立かな

遠く望むに、炭竈の煙は秋の景物として、最も妙であらう、近つて

は、炭竈の形、誠に冬の色がある、小山とも見ゆる程に土を塗つて、唯一方に煙が遁る丈けの穴を穿つたばかり火を焚く方の口は、すつかり泥塗にして、しまつてゐる、其あたりに枯木立が五六本もあらうか、離れた雜木林の中に藁屋が見える外、人影だにない。

引かふて耳をあはれむ頭巾かな

此風のびう〳〵吹きすさむ道を眞向ふに風を劈つて行くとか、霜のしたゝか下りてゐる朝を、首をすつこめて行くとか、何しろ俗にいふ耳朶も寸斷れるやうだといふやうな日を、ぐつと頭巾に被ふて、耳さむからせまいと、してゐる狀態である、「あはれむ」といふ詞は蕪村がよく使つてゐる言葉でまた、よく働いてゐる詞だ。

紫の一間ほのめく頭巾かな

頭巾はもと〳〵外で被るものであるが、特に茶席では許されてゐる

頭巾がある、勿論この場合茶席にも限るまゐが、「一間」と限つた所は、芝居や、臺所の趣ではあるまい、少くとも隱居所か、數寄屋位には見受けられるすると其凡てのたゝずまゐが、如何にも淡泊で、如何にも單簡であるだらうと想像せられる、其中に一人、當時元祿流行の紫頭巾を被つた頭があるとすると、それは餘程目立つて、一間ほのめく心地であらう。

眞結びの足袋はしたなき給仕かな

蕪村は、どうして這那處へ目が付へたであらうかとは獨り子規翁ばかりの感じでない。

この冬や紙衣着ようとおもひけり

この句を、紙衣は佗びて年よりじみてゐるから、若い間は伊達の心があつて、着たくもなつたが、此冬は紙衣着る氣になつたといふ、

つまり身の老境に近づいて世上の名利に疎くなつた心持ちだもいつて解してゐるものがある、さすれば上五字を、「この冬は」としてもよからう、殊に「は」は或場合と他の場合を區別しようする時には最も適當な助辭であるから、この説明には最も適した用ひ方であるまいか、然るにこの場合「は」といはずして、「や」といつたのは、明らかに作者の意志が他の邊にある事を示してゐる、所がこれにも説があつて、「は」といはずして「や」といつたのは、紙衣着る事を主にする厭味を避けたのだと辨じてゐるものがある、されば「を」としたらどうであらう「を」とすれば冬に重みが出來て、辨者の如き厭味を免るゝ事が出來るであらう、然るに蕪村が此處に出でなかつたのは、「は」と「や」との語の輕重に起因するのでない事を證してゐる、即ち、彼れが意は、彼が其接した冬に就いて起つた感想から、何んだか此冬は紙衣が着たくなつたといつたまでゝ極淡白な感に過ぎない、決して彼の説明する人々の如き厭味、俗情を挾んだ句ではない、若し夫れ、何が故に此の冬は紙衣着ようと思ふに至つたかと、其感想の研究になつては、發句の職分外である。

古郷にひと夜は更る蒲團かな

この句蕪村講義の時、總て過去述懷の趣きと解してゐる故に或は「一夜更けたる」といふと同義なれど、調子の輕快なる事を悦んで、「一夜は更る」といつたのであるとか、生涯中の或場合の述懷であるとか解してゐる、然るにこの句は「一夜は更る」といつて現在に用ひてゐる、この現在の狀情であるが故に、この句の活動が見らるゝのである、故にこの句は敢て主觀の句としないでも、客觀の句と解して餘程面白い、即ち歸省した子供達ちが、婆さんの問に答へたり、兄

弟同士の押問答があつたり、夫婦の笑ひ聲も聞えたり、種々なる其夜の光景が目に見えるやうである。

唐草に牡丹めでたき蒲團かな

これは蒲團の模樣を描いたのであるが、何んだかよい蒲團のやうな感がして、其上廣げられてゐるやう趣きに見える、どうしても、蒲團が敷き延べられた時に、目に映つた其儘の感らしい、積夜具などでは面白くない。

沙彌律師ころり〳〵と衾かな

大廣間に沙彌だの律師だのが衾にくるまつて、あすこにも此處にも、ころ〳〵寢ころんでゐる趣きである、沙彌だの律師だのといふものである丈けに、ころり〳〵が餘程よく響いてゐる、是非この感は二人や三人では面白くない、多人數か大廣間でなくてはならぬ、即

ち沙彌律師といつたのは多人數を意味するのである。

音なせそ叩くは僧よ鰒汁

表の戸は閉め切つて、內では河豚鍋をこそつかしてゐる所へ誰やらが、とん〳〵と訪づれる、耳を聳てゝ聞くと何にやら僧の樣だ、今僧に來られては大變だ、靜かに靜かにといふ一寸滑稽の句である、この俤を思ふと如何にも面白い、表には墨染の僧が無心で戸を叩いてゐる、內には二三の鰒友達が、靜かに箸を下ろしては目と目とを見合はして、何だかとがむるものが、あるらしい笑ひを漏らしてゐる。

鰒くへと乳母は育てぬうらみかな

この句の主人公は一寸部屋住といふ恰好で、まだ前髪のあがらない位が面白い、芝居でいへば忠臣藏の定九郎といふ所であらう、それが大胡座(おほあぐら)で鰒仲間へ交つてゐる其淺間しいさまを見て、あの乳母は

鰒を喰へよとは育てなかつたものを、何といふ心ない事であらうぞと作者の位置に立つものが批評した句である、乳母の二字があるので其身分の賤しからぬ事、其年のまだ若い事など充分にあらはれてゐる。

朝霜や室の揚屋の納豆汁

この句は曾て、室の衰へて佗びてからの狀態だと解されたやうに記憶するが、余は敢て室の全盛時代と衰微時代とを分かつ必要はあるまいと思ふ、唯今でいへば朝がへりを引手茶屋で、湯豆腐で一杯といつたやうな、つまり通の遣り口だと考へる、却つて朝がへりの引手茶屋などで、珍味佳肴の置酒などは野暮であらう、當時でいへば納豆汁かなんかで、送つて來た遊女と迎へ酒を酌みかはしてゐる、極淡白な趣を朝霜に配したものと思ふ、序にいふ、味噌汁、納豆汁

などは酒客が宿酔を拂らふ朝酒の好下物である。

袿衣の妻もこもれりくすり喰

伊勢物語の「妻もこもれり我もこもれり」から脫化したので、唯藥喰の團欒の中に妻君も交つてゐるといふ丈けの事である。

藥喰盧生を起す小聲かな

これから藥喰をしやうといふので、そつと眠つてる人を起してゐる狀態である、藥喰は鹿だの猪だのいふ者を食ふので當時は中々大びらではいけなかつたのであるから人の寢靜つた頃などから、往々はじめる、これも其さまがよくあらはれてゐる。

風呂敷に乾鮭と見しは卒都婆かな

如何にも唐突な見違ひのやうであるが、其實餘程面白い配合である、乾鮭と卒都婆とは共に荒凉たる感に於て、甚だ似たるものがある。

乾鮭や小野の芒も枯れて後

其形に於て其平扁なる所、甚だ似たるものがある。

乾鮭や判官殿の上り太刀

其句法の變轉又甚だ妙を極めてゐる。

山嵐一二の銛のぼりかな

沖に鯨が見えたといふと數十艘の船が各々印を立てゝ、漕ぐもの、突くもの、銛をなぐるもの、それ〳〵手分けをして、鯨を中にぐるりから圍む、すは此の時と見ると各舟から、てんでに何の某と銘打つたる銛を投げる、其銛は中天高く、投げ上げて、其落ちくる時の力を強めんとしてゐるのである、今第一第二の銛が空に飛んだ時、さつと吹きくる山嵐は船の印を鳴らして、この銛に力を添へるやうに見えた、其勇ましい光景を描いたのである、「一二の銛」

は一つ二つの銛といふのではない、第一第二の銛でなくては力がない。

既に得し鯨は逃て月ひとつ

上十二字は面白い所があるが「月ひとつ」でこの句が如何にも初心に聞える、彼の囂然騒然たる後、山の如き鯨は何れにか逃げ去つて、一痕の月がたゞ光つてゐるといふ例の蕪村が慣用手段を用ひたのであらうが、其事其者既に變つた見付け所ではない上に、句法が初心であるので彼が

突とめた鯨が眠る峯の月

などに比すると、其間に非常な差があるやうに見える。

鴨遠く鍬そゝぐ水のうねりかな

彼曾て

鍬洗ふ水のうねりや鴨一羽

といふのを作つた、處が鴨の位置が甚だ明らかでない、其爲めに「水のうねりや」が甚だ鴨と親しくなくなるので次に「鴨遠く」と置いた、斯う置いた爲めに、鍬を洗つた其水のうね〳〵が波を傳へて、遠く遠く動いて行く果てに、ぽつねんと鴨の立つてゐるさまがよくあらはれて、冬の夕の趣きがよく描き出される事になつた、「鍬洗ふ」といふのは如何にも感じがいゝが、また同時に仕事を終へて歸る時、即ち夕方であるといふ趣もあらはれてゐる。

水鳥を吹きあつめたり　山風

風一陣池に落ちて、水の面は波をうたゝつ、幾重の輪をだん〳〵に描いて行く、彼處、此處に浮んでゐた水鳥は、白う羽を亂して、波のうねりに送られながら彼方の岸に吹きあつめられた、書き去つて

一讀すると余が叙景のさも優長に聞えるのは筆の延びた罪で、句は中七字「吹きあつめたり」に其寒く淋しき光景をあらはしてゐるのである。

五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉

などと同一筆法である、殊に「けり」といはずして「たり」といつたのは時間の問題にあらずして、音調上、如斯破裂音を要したのである。

鴛鴦や國師の沓もにしき革

寺の放生池などであらう、鴛鴦が相並んで小春日和に羽をさらしてゐる、其丁度さきの沓脱石には、國師の沓が一足ちやんと整つて、美しう置かれてある、一對の鴛鴦が美の神の繪筆に成れる美しさと、一足の革沓が吳女漢女の手に成れる美しさと、春花秋葉其妍を爭ふてゐる趣きである。

便船のこたへつれなき千鳥かな

船宿に立ちよつて、もう船は出ないだらうか便船を頼みたいがといふと、船は疾つく出て仕舞つて、更けてはモウ便船もないといふ、闇は暗らし、時は闌けたし、茫然見渡す、海面に、何處ともあやなく、千鳥の聲が聞えた趣である、如何にも千鳥の聲が、あはれに聞こえる。

望月の其如月に鰒はなし

西行の「花のもとにて我死なん其如月の望月の頃」から脱化したので、さてあの西行がいつた頃に鰒があつたら好いのだが、あいにく鰒がないので、鰒を食つて花の前にくたばるといふ洒落も出來ないといつたのである。

細道をうづみもやらぬ落葉かな

至極單純な句であるが、其趣きは忍ぶに餘りがある、這那句はいづれに向つても手足を付くる處がない、百誦唯其妙を得るのである。

木ひごつに飛花落葉や歸り花

余は這那のを俗な趣向だといふのである、丁度落葉のする頃に歸り花がまた散つてゐるといふのなら、其れは何の不思議もない、唯「木一つに」と説明を附した處に厭味がある、蕪村も此處へ至つては全然失敗だ、同じ歸り花の句に

屋根ふきがふしんな顔や歸り花

焚火してひやさぬ庭や歸り花

といふのがある、一讀共に中七字が俗に聞えるが　此の二句は却つて凡でない、「ふしんな顔や」といつた所に、怪訝な顔付をしてゐる屋根ふきのまぬけた相がよく表はれてゐるし、「ひやさぬ庭や」とわざ

と理窟臭くいつた所に、時ならぬ歸り花の趣がよく表はれてゐる。

冬木立家居ゆかしき麓かな

冬は木に總て趣が出來てゐるから、麓に一軒木の間がくれに藁葺の屋根などが點綴して見えると、何人の住居であらうかと思はれる程にゆかしいものである。

冬の梅きのふやちりぬ石の上

由來、「きのふや」といへば下は「ちりし」であるべき筈だが、其次の「い」。「い」といふ發音と、この「ちり」。「ー」といふ發音との間に挾まる「い」が母音である爲めに、連續したる詞の上には勢ひ落ち(ドロップ)易いので、耳には「ー」といふ摩擦音が二つ連けて聞えるやうになる、この不快な發音を避ける爲めに「ちりぬ」としたのである、かゝる事は韻文には往々免かれぬ處である、この句の趣は

柿の花きのふちりしは黄ばみ見ゆ

などとよく似て居る、唯、時候の差異が二句の差異を表はしてゐる事は明らかに示されて居る。

水仙に狐遊ぶや宵月夜

彼は狐を好んで遣つてゐる、どんなに用ひてゐるだらうか。

公達に狐化たり宵の春
春の夜や狐の誘ふ上童
短夜や金も落さぬ狐つき
狐火や五助畠の麥の雨
狐火やいづこ河内の麥畠
飯盗む狐追ふ聲や麥の秋
麥秋や狐の退かぬ小百姓

巫女に狐戀する夜寒かな
石を打狐守る夜の砧かな
闌夕狐のくれし奇楠を炷ん
小狐の何にむせけん小萩原
小狐の隱れ顔なる野菊かな
狐火の燃えつくばかり枯尾花
草枯れて狐の飛脚通りけり
狐火や髑髏に雨のたまる夜に

陰暗濛々たる夏の夜の狐火は遠く明滅し、清朗涼寒なる冬の夜の狐火は近く烈々としてゐる、「髑髏の狐火」は理想の句である、狐其者を具體的に表はしてゐるのは、秋冬であつて、朦朧として、其影に狐のゐるのは春夏である、故に「春の夜や狐の誘ふ上童」は恍惚として

上童の春の夜を逍遙してゐる狀態が見えて、狐の影は認められないが、「巫女に狐戀する夜寒かな」は扉に狐の忍びよつてゐる狀態が瞭と見えて、巫女の方は寧ろ賓になつてゐる、又「公達に狐化けたり宵の春」を繪にしやうならば、狩衣、指貫のやごとなき公達を描いて、そと狐の尻尾丈けでも着けやうか、「草枯れて狐の飛脚通りけり」を繪にするには、是非狐に繩の鉢卷かなんかをさせて肥料杓の一本も擔いでる處が描きたい。

海士の家の鷗にしらむ夕かな

一字を增減するを許さず、一物を取捨するを許さず、而して遂に繪にする事を許さない。

蕪村俳句評釋 終

明治三十七年三月　印刷
明治三十七年三月　發行

著作者　佐藤紅綠
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區鍋町二十一番地
印刷人　齋藤章達　東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社　東京市日本橋區兜町二番地

蕪村俳句
正價二十錢

著作權所有

發兌　大學館
東京市神田區鍋町二十一番地
電話本局三〇六七番

9/11/38

内藤鳴雪翁序　寒川鼠骨君著

俳文作法指南

價卅五錢　郵税四錢

總論—俳文とは何にぞ、俳文研究の必要、世人の誤解、俳文の歴史、創作法—俳文の種類、定題と取材、結構と裝飾、簡勁と諧謔、文體文範—記事、説、辭、辯、解、賦、曲、譜、銘、贊、頌、箴、傳、文、歌、誄、序、跋、紀行、日記

附錄—作者概評

芭蕉、去來、許六、嵐雪、蕪村、也有、一茶、丈草、支考、其角等諸俳家の文九十餘篇を載せ評註を加ふ。

京都帝國大學教授　池邊義象先生序
池田錦水君著

創作自在 美文指南

價二十錢　郵税四錢

本書は美文創作に關する一切の綱目を具備す、作例として、古今和文の物語、戰記、紀行を始め、德川時代の文豪、西鶴、樂林子、馬琴、京傳、種彦、一九其他諸大家の稗史戲曲を拔粹し、現代著名の美文小説家が傑作中の名文章を採り、文體に就いては、或は莊重、典雅、艶麗、洒脫、豪莊、滑稽諧體に渡り、起首結末、波瀾曲折、抑揚頓挫の句法、文疵、字病、美辭、形容、を説き、時勢の湖流に鑑み、最も新式に、最も趣味深く、學生文士の座右の寶典として、著者苦心の新書なり。

寒川鼠骨君著　再版

言文一致手紙文

價十八錢　郵税四錢

親族間の手紙には遊學生より父へ、在米の弟より兄へ、など十八篇、友人間の手紙には避暑地より東京の友へ、出產のお祝ひ、など廿四篇、普通交際間の手紙には、同鄕の先輩へ、初對面の人へ、卒業祝ひ、など廿一篇、葉書親しき間書き方には役所から妻へ、金策依賴、例會通知、など三十篇、普通の間柄の文例は、醫者を招く、品物の注文など二篇、四季帖春の部には、年賀狀を始め十四篇、夏の部には、暑中見舞、など八篇、秋の部には、月見の誘引、など七篇、冬の部には、寒中の見舞、歲暮狀、など、七篇を載せたり。著者は人々の職業、境遇、年輩などの異なる點を鑑みて著作せられしもの。

佐々木信綱先生閲
千勝義重先生著

類題 萬葉短歌全集

本書は萬葉集の短歌四千餘首を四季戀雜の三編に分ち又これを類題に小分す。且つ從來讀誦に困難を感ぜし萬葉假名を普通の假名文字に改めて讀者の便を圖れり。異本を參考し從來の誤謬を訂正す。和歌を學ぶもの〻座右の寶典。

佐々木信綱先生校閲
千勝義重先生著

三十六歌仙集評釋

價十五錢　郵税四錢

本書は柿本人麿、山部赤人、在原業平、小野小町を始め、三十六歌仙の和歌を評釋し、論せり、且つ小傳を記して歌仙の人物を知しむ。

歌道の眞髓を極めむとするもの宜しく三十六家が、異色異彩を親知し且つ萬葉、古今、新古今の精華を學ぶべきなり。

佐々木信綱先生校閲
千勝義重先生著

西行法師

山家集評釋

價二十錢　郵税四錢

山家集の歌は西行其の人に似て淡泊幽清高致逸響後人の及ひ易からざるものあり、本書は正確なる原本により、稀世の珍本異本を參考し、簡明可愛に全部を評釋せり、文士歌人無比の良書。

信夫恕軒翁序　岩井松風軒著

長恨歌評釋

五版　價十五錢　郵税二錢

長恨歌は唐の文豪白樂天の傑作也○全篇百二十句の長詩也○玄宗皇帝好色の顚末也○美人楊貴妃の一代記也○色慾奢侈を戒むるの文也○文章優麗巧妙絶倫也○作詩作文の模範資料○青年學生座右の珍寶也。

文學士辰巳小次郎君序　岩井松風軒君著

遊仙窟評釋

四版　價廿五錢　郵税四錢

遊仙窟は唐の張文成が仙女に託し、戀愛の眞想を叙述したるものにして文章の艶麗巧妙なること空前絶後と稱せらる古代文士の愛誦措ざる所本書訓讀義解評解の三點に分ち最も平易の語句を用ゐ通俗的に評したるものなり。

花天月地

四版　價廿錢　郵税四錢

春の日、夏の夕、秋の夜、冬の朝、戀、離別、雜の部に分ち當代有名の詩人島崎藤村、大町桂月、河井酔茗、佐々木信綱、土居晩翠、鹽井雨江、武島雨衣、與謝野鐵幹、太田玉茗、田山花袋、大野洒竹、正岡子規、大和田建樹、國木田獨歩、宮崎湖處子、馬場孤蝶等の傑作を集む七十有餘題避暑消閑の好伴侶實に文士必携の書。

緒方流水君序　石橋玄潮君著

新體詩指南

四版　價廿五錢　郵税四錢

新體詩の性質を明にし其作法を詳説し且其模範たる作例と組織す可き資料たる類語を蒐集す例題は春夏秋冬戀別離雜の部に分ち大家の傑作を載す又英詩作法を掲く。

池田錦水君著

戀愛麗句類

價二十錢　郵税四錢

●人品＝美人、豪傑、遊女、僧侶等其他●敬項●端緒＝初戀、見る戀、文の戀等其他●戀情＝忍び難き戀、遂げぬ戀、隔たれる戀、其他●至情＝思ひ煩ふ戀、切なる戀、二世を思ふ戀等其他●浮漂＝假初めの戀、道ならぬ戀、誘はるゝ戀等●風評＝浮名立たる戀、無名立つ戀、●成就＝相思ふ戀、成りし戀●會合＝逢ふ戀、忍び逢ふ戀、待つ戀等其他●契盟＝契る戀、誓ふ戀、●別離＝別るゝ戀、逢ふて後の戀、尋ぬる戀等●煩悶＝逢へぬ戀、妬む戀、恨む戀等其他●失戀＝片戀、破れたる戀、及ばぬ戀●嫌厭＝厭ふ戀、拒む戀●滑稽●時季●雜●緒言

古今小説大家の雄篇大作中より戀愛に關する美辭麗句を拔粹して これを右の各項に關して編纂せるもの、小説家美文家の机上の珍書。

エト 8N 35

俳句入門叢書

内藤鳴雪翁述

俳句入門叢書第一編 **俳句獨習**

價二十錢　郵税四錢

河東碧梧桐君述

俳句入門叢書第三編 **其角俳句評釋**

價二十錢　郵税四錢

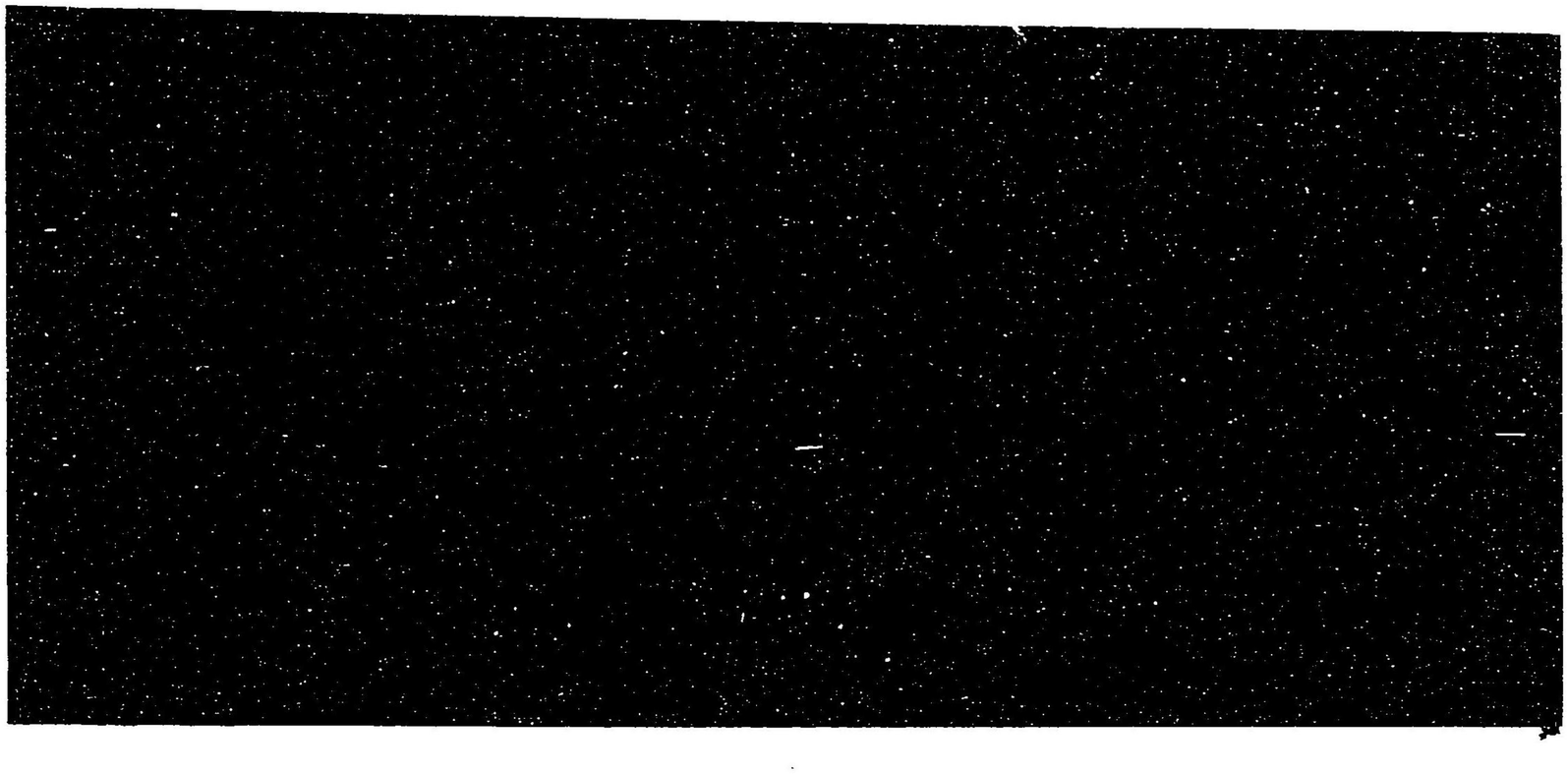
佐藤紅綠君述

俳句入門叢書第三編 **蕪村俳句評釋**

價二十錢　郵税四錢

内藤鳴雪翁述

俳句入門叢書第四編 **芭蕉俳句評釋** 三卷



94
199

087532-000-4

94-199

蕪村俳句評釈

佐藤　紅緑／著

M37
DBE-0902